

## ミャンマー・サイクロン災害救援

国際医療救援部長 医師 槇島 敏治

派遣地域:ミャンマー

派遣期間:2008年5月8日～5月26日

平成20年5月2日から3日にかけてミャンマー南部のデルタ地帯からヤンゴンを襲ったサイクロンはその上陸地の名前からナルギスと命名されました。ミャンマー国営放送によると、被害は死者78,000人、行方不明者56,000人、そして240万人が被災したといわれています。

国際赤十字・赤新月社連盟はFACT(Field Assessment and Coordination Team)の派遣を決定、日本からは私が保健医療の担当者として参加しました。このFACTというのは大規模災害時に迅速に有効な救援活動を行うために連盟が考案したシステムで、災害が発生するとあらかじめ専門研修を受けたメンバーから選抜された要員が被災地に派遣されます。FACTは緊急に被害の程度や救援のニーズを調査し、その結果から支援計画を策定し連盟に報告します。連盟はその計画に基づき各国赤十字社に緊急支援のアピールを出すとともに、必要ならERUの派遣を決定するのです。

私は5月7日にミャンマーのビザを取得し、5月8日に出発、連盟のゾーン・オフィスがあるマレーシアのクアラルンプールで情報収集を行い、5月10日にミャンマーのヤンゴンに到着しました。実はFACTとして14名が召集されたのですが、チームリーダーを含む多くの要員がビザを取れなくて、ミャンマーに入れたのは私を含めて5名だけでした。

ミャンマーでは外国人の活動は制限されていて、国際赤十字の救援要員でもヤンゴン市内から出ることはできませんでした。そのため、被害の最もひどかった地域の調査をすることができず、情報収集はヤンゴン市内の被災地や避難所の調査と、市外の被災地で活動できるミャンマー赤十字社のスタッフの調査結果や、保健省の訪問、保健医療分野のNGOや救援団体とのミーティングに限られていました。

こうして得られた、限られた情報からミャンマー赤と連盟のミャンマー代表部の医師らと協議を行い、2種類の保健医療の支援計画を策定しました。第1の支援計画は日赤も保有しているBHC-ERU(Basic Health Care-Emergency Response Unit:基礎保健型緊急対応ユニット)を派遣するものです。サイクロンにより病院の20%、保健センターの50%が大きな被害を受けており、それらの医療施設を支援するためにBHC-ERUの診療所モジュールを導入します。本来なら医療チームも派遣するのですが、外国人は被災地に入れないので、最小限の要員だけヤンゴンに派遣し、現地の医師や看護師、ミャンマー赤の要員にERUに設営・管理、災害医療の講習を行なうことによって、ミャンマー人の手で救援医療を行ってもらおうという計画です。



(ERU 機材を確認する槇島医師)

連盟からの要請に応じて、日赤は BHC-ERU を成田に運ぶとともに、医師や看護師、技術要員の派遣の体制を整えました。しかし、ミャンマー赤は保健省との関係の中で、医療支援事業には参画しないとの姿勢を維持したため、この支援計画は実現しませんでした。

第 2 の支援計画は地域レベルでミャンマー赤のボランティアを活用しての保健衛生状態の改善と、伝染病の感染予防です。ミャンマー赤は救急法を習得した 2 万 8 千人のボランティアと、1000 人を超す CBFA (Community Based First Aid) の指導員を有しているので、被害の大きかったヤンゴン管区、エーヤワディ管区の 47 の郡区ボランティアを対象にサイクロン災害に特化した特別研修会を開催し、それぞれの住む地域で被災者の支援に当たってもらおうとするものです。

UNICEF や WHO、ICRC の協力も得て、5 月 28 日から 6 月 10 までに 8 回の 1 日研修会を開催し、280 名のボランティアに対して、飲料水の浄化法、コレラやマラリア、デング熱の予防法、遺体の処理法、こころのケアの講習を行い、救急バッグや、T シャツ、レインコートを支給しました。その後の彼らの地域での活動は高く評価され、ミャンマー赤の社長の要請で、今後 7 月までに、さらに多くのボランティアを養成することと、彼らに対してリフレッシュ研修を行うことが決まりました。



(食糧配布を手伝うミャンマー赤ボランティア)

FACT の要員としては被災地の調査をし、支援計画を立て、現場で連絡調整を行うのが任務なのですが、今回は被災地に入れなかったため、調査に必要な目や耳、現場で活動する手や足は全てミャンマー赤に頼らざるを得ませんでした。支援計画を立てる頭だけが役に立ったといえるでしょう。

国際赤十字の災害救援は被災国の赤十字社の救援活動を支援するものです。その意味では、我々外国人が直接、救援活動を行うことは本質的なことではなく、彼ら自身が被災者を支援することが重要なのです。ただ、彼らが支援活動をおこなう余力がないときに、我々が彼らの代わりに支援を行うのです。

サイクロンの襲来からずっと救援活動を続けてきたミャンマー赤の職員もボランティアも疲弊しています。それにもかかわらず、被災者のために笑顔を絶やさず日々、働いてくれている彼らに感動を禁じえません。



(被災地域の上空写真)